

親子関係が青年の無気力感に与える影響

—エゴ・レジリエンスが果たす機能—

目白大学人間学部 小野寺敦子

【要約】

本研究では青年期後期にある男女の幸福感や無気力感が父子関係／母子関係とどのように関わっているのかについて次の2つの分析によって明らかにした。分析1では、まず父親・母親に対する肯定的感情と否定的感情の男女差を検討した。その結果、女子は父母両者に対して肯定的感情を男子よりも強くいだいていたが、否定的感情は男女で有意な差は認められなかった。次に大学生の生活への満足感と幸福感が親への感情とどのように関連しているかを検討した。女子の生活満足感は母親に対する否定的感情とは負の関連が、父親に対する肯定的感情とは正の関連がみられた。このことから女性が日々の生活に満足感を感じ、幸せであると思えるには父親との良好な関係を築くことが大切であるといえる。分析2では青年の無気力感が幼少期からの親のしつけ方略とエゴ・レジリエンスとどのように関連しているのかについて共分散構造分析を使って検討した。その結果、幼少期からの母親のほめるしつけが子どものエゴ・レジリエンスを高め、そのエゴ・レジリエンスが無気力感を軽減させる要因として機能していることが推測された。

キーワード：エゴ・レジリエンス、無気力感、父親／母親への肯定的感情、否定的感情

問題と目的

「何をやっても楽しくない」「やる気が起きない」「毎日がつまらない」そう口にする若者が近年、ますます増えてきている。こうした青年の心理状態はステューデント・アパシー (student apathy) (笠原、1977；鉄島、1993) や無気力感 (小田、1991；下山、1997；下坂2001) と命名され様々な角度から研究がおこなわれている。特にアパシーや無気力感を測定する尺度は数多く開発されており、例えば鉄島 (1993) はアパシーを授業、学業、大学生活の3側面から測定できる尺度を提案している。また下山 (1995) は無気力に陥りやすい性格特性に着目し「張りのなさ」「自分のなさ」「味気なさ」の3因子を明らかにする尺度を開発している。さらに下坂 (2001) は無気力感として「自己不明瞭」「他者不信・不満足」「疲労感」の3因子を見出し、中学生・高校生がいただく無気力感が

学習意欲や友人関係についての学校適応感と関連していることを明らかにしている。

さきの鉄島 (1993) は大学生のアパシー傾向に親イメージがどのように関与しているかを検討し、アパシー傾向の強い男子は母親に対し父性的イメージを強くいだいていることを明らかにしている。さらに同傾向が強く、母親と密着した関係にある女子は意欲が低い傾向にあると鉄島は述べている。この鉄島の結果は、親子関係が子どもの精神的健康に強い影響力を及ぼしていることを示している。親と子の関係のみならず、夫婦関係の良し悪しが子どもの精神的健康に影響することを菅原・小泉・菅原 (2002) は指摘している。この菅原らの研究では夫婦関係と子どもの抑うつとの関連を検討しているが、抑うつ傾向が高い子どもの母親は夫への愛情が低いことが明らかにされている。

さて親から子への影響は両者の性の相互作用

によっても異なる。父親と息子、母親と娘という同性の組み合わせと父親と娘、母親と息子という異性の組み合わせによって親からの影響が異なってくるというのである。例えば小野寺(1984)は父親と娘とのかかわりについて検討し、娘の結婚観や異性観に父親が重要な影響を与えていることを指摘している。特に父親が母親を情緒的に支持していると娘が評価している場合、父親を魅力的だと感じ自分も父親のような男性と結婚したいと考える傾向があると小野寺は述べている。また諸井(2006)は小野寺(1984)が作成した尺度を使って父親と娘との関係を分析している。その結果、小野寺同様に「人間の魅力」「異性としての魅力」「両親間の親和」の3因子を父親の魅力として抽出している。さらに父親との過去の接触経験が現在の父親への魅力度とどのように関連しているかを共分散構造分析によって検討し、父親からの統制的養育態度が現在の父親の魅力度を高めるといふ結果を明らかにしている。つまり幼少期に父親から厳しくしつけられていることが決して父親への嫌悪感につながってはいないのである。また日本における父娘研究について展望論文を執筆している春日(2000)は、子どもの自尊感情の高さは親との親密なかかわりに密接に関連していることを示す論文を紹介している。そして特に娘が父親に対して良いイメージをいっているほど、さらには父親からの情緒的支持を感じているほど、娘の自尊感情が高くなるという知見を述べている。

Block(1980)はやる気、情緒そして行動が個人の中でバランスよく機能していくために重要な要因としてエゴ・レジリエンスという概念を提示し14項目からなるエゴ・レジリエンス尺度を提起している。Blockによれば、このエゴ・レジリエンスとは自我を調整する力であり、過度のストレスにさらされたときに適切な適応状況に自我を導く力であると説明している。小野寺(2007)は、このBlock尺度を使用しエゴ・レジリエンスの高低と母親の養育態度との関連を検討している。その結果、エゴ・レジリエンスの高い母親は自信をもって子育てをおこなっており、柔軟な養育態度を示し、うつ傾向も低く精神的に安定していることを明らか

にしている。

ところが2000年以降のレジリエンス研究ではエゴがつかないレジリエンス(resilience)、レジリエンシー(resiliency)という表現も登場している。Masten & Reed(2002)はレジリエンス(resilience)とは「逆境などの困難な状況にうまく適応し乗り越える力」と定義している。日本では小塩(2002)や石毛(2004)・石毛・無藤(2005)がレジリエンスという概念を使った研究をおこなっている。例えば小塩はネガティブな出来事からの立ち直りを支える心理的要因としてレジリエンスを掲げており、ストレス状況下ではレジリエンスの強さがそれを乗り越える要因として機能していることを示唆している。また石毛(2004)は中学生のレジリエンスと無気力感との関連について研究をおこない、石毛・無藤(2005)はレジリエンス尺度を開発し「自己志向性」「関係志向性」「楽観性」の3側面からレジリエンスをとらえている。

このように無気力感や親子関係(親と子の性の相互作用)そしてレジリエンスの先行研究を概観してみると、現代青年の無気力感に父親/母親が及ぼす影響を検討した研究、さらには無気力感を抑制し生き生きとした充実した生活を送るには何が必要かを検討した研究はこれまでほとんど行われていないことが示唆された。そこで本研究では青年の親との関係が、現在の無気力感に与える影響を解明するとともに、無気力感を抑制する要因としてエゴ・レジリエンスをとりあげ、これらの諸要因間の関連を検討するモデルをたて分析をおこなっていくことにしたい。具体的な分析過程においては次の2つの視点から分析をおこなう。分析1では現代の青年たちが毎日の生活がつまらないために無気力感を感じることが多いという指摘に対し、それとは反対に生活への満足感が得られている青年たちに注目し、こうした満足感の高い青年たちが親にどのような感情をいっているのかを検討する。その検討は先の先行研究にあったように親からの影響は子どもの性別によって大きく異なることが予想されるので男女に分けて実施する。次に分析2ではこれまでに受けてきた親のしつけ方略と無気力感との関連を共分散構造分析を使ったモデルを提起することで検討す

る。その際、エゴ・レジリエンスがどのように無気力感の軽減に関与しているかという視点を取り入れることにする。そうした分析をとおして無気力感がどのような要因によって形成されていくのかというその形成機序を明らかにし、こうした無気力感を少しでも軽減させるのにエゴ・レジリエンスが果たす機能を検討したい。

方法

調査対象者：

M大学の大学生に対して授業時間内にアンケートを配布したところ、男子91名、女子250名の合計341名から有効回答を得ることができた。アンケート対象者の平均年齢は男子は18.6歳、女子は18.4歳であった。調査の実施時期は2007年の7月であった。

調査項目：

乳幼児期の子どもは親に身体的にも心理的にも依存しているが、青年期になると親とのかわり、依存から自立へと変化していくと考えられる。すなわち青年は、あるときは親を心のよりどころとするが、あるときには親を批判し対立するといったアンビバレントな感情をいっていると考えられる。そこで本研究では親を頼りにし困ったときは意見を求め、自分の気持ちを理解してほしいと思う感情を親への肯定的感情、親をうっとおしく感じたり対立するといった感情を否定的感情ととらえ項目を設定した。

- ①父親／母親に対する肯定的な気持ちを尋ねた各6項目。これらの6項目には「困ったときには父親・母親にこれでよいかどうかをきく」や「父親／母親には私の気持ちを常にわかってもらいたい」といった親から自分のやっていることを認め、気持ちを理解してほしいといった承認欲求、および「辛い時・悲しいときには父親／母親のことを思い浮かべる」「父親／母親は私の心の支えである」といった親への愛着を示す内容が含まれている。
- ②父親／母親に対する否定的な気持ちを尋ねた各6項目（例：父親／母親とはわかりあえない部分がある。父親／母親から傷つくことをいわれたことがある）。
- ③父親／母親のこれまでのしつけ方略の評価：

「ほめるしつけ」5項目（例：父親／母親は私のよいところをほめてくれる（くれた）、父親／母親はがんばれと励ましてくれる（くれた）。「けなすしつけ」5項目（例：父親／母親は私を叱るときたたく（たたいた）、父親／母親から“バカ”とか“頭が悪い”とか言われる（言われた）。質問の教示文では「父親／母親はあなたに対してこれまでどのような態度をとってききましたか」と尋ね、幼少期から現在に至るまでの親の養育態度を評価してもらった。

- ④現在の生活全体への満足感を明らかにするために、友人関係の満足感、大学生活全般の満足感、親との関係の満足感そして生活全体の満足感を尋ねた。
- ⑤青年期の男女が現在の生活をどのようにとらえているのかについて「無気力感」という視点からとらえることにした。下坂（2001）の無気力感尺度の19項目に加えて食生活の様子（例：朝食を食べないことがある、ファーストフードを食べる）と大学への授業への取り組み（例：なんとなく授業をサボることがある、朝寝坊などで授業に遅れることがある）を含めた27項目を設定した。食生活や大学での授業の取り組みに関する項目を加えたのは、下坂の項目が無気力感の“意識”に焦点をあてた項目であったため、“生活態度”の側面からも無気力感を検討することにしたためである。
- ⑥Block & Kremen（1996）によるThe Ego Resilience Scale（ER89）の14項目

以上、①から⑥までの設問に対して「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」までの4件法で回答を求めた。

結果と考察

分析1：父親・母親への肯定感・否定感が青年の生活全体の満足感に及ぼす影響

(1) 父親／母親の肯定的・否定的感情の男女比較

父親と母親に対する感情は男女によってどのように異なっているかを明らかにするために肯定的な感情を示す6項目と否定的な感情を示す

Table 1 父親/母親への感情の男女比較 (平均値と標準偏差を示す)

	男子 (91名)	女子 (250名)	t 値
1. 父親と話す時には気を使う	2.12 (1.12) >	1.80 (.91)	2.65 **
母親と話す時には気を使う	1.66 (.85)	1.57 (.77)	.86
2. 父親のことをうっとおしく感じる	2.12 (1.00)	2.12 (.96)	.03
母親のことをうっとおしく感じる	1.96 (.91)	1.88 (.80)	.75
3. 父親とはわかりあえない部分がある	2.51 (1.05)	2.43 (.98)	.62
母親とはわかりあえない部分がある	2.28 (.99)	2.15 (.88)	1.15
4. 父親は私の生活に口出しする	2.20 (1.02)	2.07 (.98)	1.10
母親は私の生活に口出しする	2.53 (.99)	2.44 (.96)	.77
5. 父親とは意見が対立することが多い	2.21 (.98)	2.10 (1.00)	.92
母親とは意見が対立することが多い	2.22 (.93)	2.28 (.97)	-.49
6. 父親に心が傷つくことを言われる	2.05 (1.11)	2.06 (1.03)	-.08
母親に心が傷つくことを言われる	2.12 (1.08)	2.17 (1.02)	-.40
7. 困ったときには父親にこれでよいかさく	2.26 (1.16)	2.13 (.99)	1.01
困ったときには母親にこれでよいかさく	2.44 (1.09) <	2.71 (.97)	-2.20 *
8. 辛い時・悲しい時には父親のことを思い浮かべる	1.63 (.84)	1.79 (.85)	-1.60
辛い時・悲しい時には母親のことを思い浮かべる	1.69 (.88) <	2.05 (.93)	-3.21 ***
9. 父親に私の気持ちを常にわかってもらいたい	2.13 (1.00) <	2.38 (.99)	-1.20 *
母親に私の気持ちを常にわかってもらいたい	2.23 (1.01) <	2.66 (.93)	-3.64 ***
10. 何か重要な決定をする時には父親に意見を求める	2.30 (1.07)	2.23 (.97)	.55
何か重要な決定をする時には母親に意見を求める	2.45 (1.00) <	2.74 (.96)	-2.41 *
11. 何かする時には父親に励ましてもらいたい	2.20 (1.01) <	2.32 (1.05)	-2.32 *
何かする時には母親に励ましてもらいたい	2.13 (1.00) <	2.65 (1.02)	-3.88 ***
12. 父親は私の心の支えである	2.18 (.99) <	2.48 (1.06)	-2.35 *
母親は私の心の支えである	2.42 (1.02) <	2.79 (.99)	-2.92 **

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

6項目について両群の平均値を男女別に求めその差の検討をおこなった (Table1)。まず父親への肯定的な感情として設定した6項目の中で男女に有意な差が認められたのは「父親には私の気持ちを常にわかってもらいたい」「何かする時には父親に励ましてもらいたい」「父親は私の心の支えである」の3項目であり、いずれも女性の平均値の方が男性よりも有意に高くなっていた。女性は父親に対して自分の気持ちを理解し認めてもらいたいという気持ちが強い傾向がみられたことになる。それに対して母親への肯定的な感情は6項目すべてにおいて女性の平均値が男性よりも有意に高くなっていた。このことから女性は母親を心の支えとし肯定的な感情を強くいだいていることがわかった。し

かし男性も父親に対しては女性と同程度に辛い時や悲しい時には父親のことを思い浮かべ、何か重要な決定をするときには父親に意見を求める傾向があることも明らかになった。

では父親・母親に対する否定的な感情に男女差はあるのであろうか。男女差が認められたのは「父親と話をする時には気を使う」においてのみであり、男性の平均値の方が女性よりも高かった。否定的感情を明らかにするために設定したその他の項目において男女差は認められず、父親および母親に対する否定的な感情 (例: 父親・母親のことをうっとおしく感じる・父親・母親から意見が対立することが多い) は男女で同程度であることがわかった。

(2) 父親／母親への肯定的・否定的感情項目の因子分析結果

父親・母親への肯定的あるいは否定的感情として設定した上記の各6項目ずつが果たして肯定的・否定的感情としてのまとまりある項目を構成しているかどうかを確認するために男女のデータをあわせて因子分析を実施した(Table2)。

まず、主因子法による因子分析に続いてバリマックス回転を実施した。その結果、男女合わせた341名のデータでは第1因子に父親を心の支えとし困ったときには意見を求め、自分の気持ちを理解してほしいと思うといった内容において因子の負荷量が高く父親への肯定的感情が抽出された(因子寄与率は37.65%)。次に第2因子に父親への否定的感情6項目(因子寄与率は18.20%)が入った。したがって第1因子を「父親への肯定的感情」因子、第2因子を「父親への否定的感情」因子と命名した。また母親データでは父親データと同様に第1因子に母親への肯定的感情の6項目(因子寄与率は35.05%)、第2因子には否定的感情の6項目(因子寄与率は19.11%)となったため、それぞれ「母親への肯定的感情」因子、「母親への否定的感情」

因子と命名した。そして各因子の6項目の素点を合計し項目数で割った合成得点を算出し「父親への肯定的感情得点」「父親への否定的感情得点」「母親への肯定的感情得点」「母親への否定的感情得点」とした。内的整合性を検討するために各合成得点の α 係数を算出したところ肯定的感情の場合の α 係数は父親が.834、母親が.834、さらに否定的感情の α 係数は父親が.823、母親が.805という高い値が得られた。

(3) 父親／母親が行ってきたこれまでのしつけ方略への評価

父親および母親が現在に至るまでに子どもに対してとってきたしつけ方略を評価してもらった。項目は「ほめるしつけ」「けなすしつけ」ともに5項目ずつであった。(1)同様に男女の平均値の比較を各項目ごとにおこなった。「けなすしつけ」項目の5項目の中で男女差があったのは「父親は私をしかる時たたく(たたいた)」で男性の平均値(2.10、SD=1.13)の方が女性の平均値(1.73、SD=1.01)よりも5%水準で有意に高かった(t値=2.84)。「ほめるしつけ」項目の中では「小さい頃父親は頭をなでてくれた」(男子の平均値:2.52、SD=1.09、

Table 2 親への感情項目の因子分析結果

	第1因子		第2因子	
	父親への肯定的感情	母親への肯定的感情	父親への否定的感情	母親への否定的感情
何かする時には父親／母親に励ましてもらいたい	.753	.832		
父親・母親は私の心の支えである	.667	.676		
何か重要な決定をする時には父親・母親に意見を求める	.668	.713		
父親・母親に私の気持ちを常にわかってもらいたい	.650	.665		
辛い時・悲しい時には父親・母親のことを思い浮かべる	.597	.587		
困ったときには父親・母親にこれでよいかきく	.596	.515		
父親・母親とは意見が対立することが多い			.766	.689
父親・母親のことをうっとおしく感じる			.722	.746
父親・母親とはわかりあえない部分がある			.716	.756
父親・母親に心が傷つくことを言われる			.645	.515
父親・母親は私の生活に口出しする			.592	.628
父親・母親と話す時には気を使う			.447	.475
寄与率 (%)	37.65	35.05	18.20	19.11

女子の平均値：2.80、SD = 1.06、 t 値 = 2.13 $p < .05$)、「父親はすごい！すごかったね！といってくれる（くれた）」(男子の平均値：2.43、SD = 1.03、女子の平均値：2.72、SD = 1.07、 t 値 = 2.26 $p < .05$)「母親はすごい！すごかったね！といってくれる（くれた）」(男子の平均値：2.54、SD = 1.05、女子の平均値：3.02、SD = .96、 t 値 = 3.96 $p < .001$) の3項目において女性の平均値の方が男性よりも有意に高かった。(2) 同様に父親と母親別に10項目について主因子法からバリマックス回転を実施する因子分析をおこなった。父親のデータを分析した結果、第1因子では「父親はよくどなる」「バカとか頭が悪いとか言われる」などの5項目で因子負荷量が高かったので「父親のけなすしつけ」因子と命名した(因子寄与率は36.5%)。次に第2因子では「父親は私のよいところをほめてくれる（くれた）」「父親はすごい！すごかったね！といってくれる（くれた）」などの5項目で因子負荷量が高かったので「父親のほめるしつけ」因子とした(因子寄与率は25.0%)。さらに母親のデータも同様の方法により因子分析をした結果、父親同様の結果が得られたため「母親のけなすしつけ」因子(因子寄与率は34.0%)、「母親のほめるしつけ」因子と命名した(因子寄与率は25.8%)。これら5項目の素点を合計し項目数で割って合成得点をそれぞれ算出した。内的整合性を検討するために各合成得点の α 係数を算出したところ「けなすしつけ」の α 係数は父親が.787、母親が.775、さらに「ほ

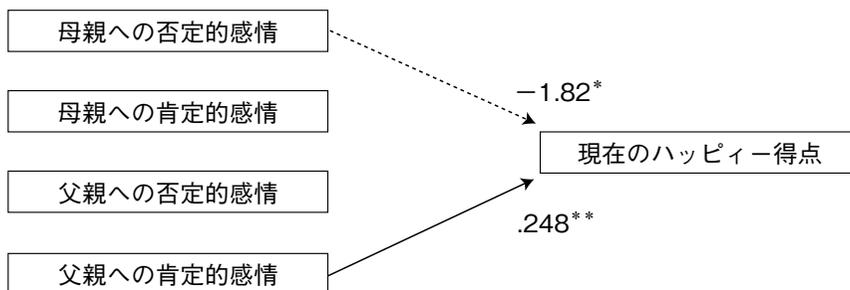
めるしつけ」の α 係数は父親が.880、母親が.872という高い値が得られた。

(4) 現在の生活満足感に親への肯定的感情・否定的感情はどのような影響を与えているのか？

青年が現在の生活に対しどの程度満足して生活しているのだろうか？そしてその生活の満足感には父親あるいは母親への感情とどのように関連しているのだろうか。その満足度を大学生活への満足度、友人関係への満足度、親とのかかわりへの満足度そして“私は現在、幸せである”という幸福感全体を尋ねた項目を設定し尋ねた。次にこれら4項目の素点を合計し項目数で割った合計得点を男女別々に算出しハッピー得点とした。そしてこのハッピー得点を従属変数に父親への肯定的感情得点、母親への肯定的感情得点、父親への否定的感情得点、母親への否定的感情得点を説明変数とした重回帰分析を男女別におこなった。その結果、女子の重回帰分析においてのみ信頼性のある分析結果を得ることができた。女子の重相関係数の2乗は.112、分散分析の結果のF値が7.75であり0.1%水準で有意であった。有意な標準偏回帰係数が得られたのは、母親への否定的感情得点において負の数値(-.182 $p < .05$)が、父親への肯定的感情得点において正の数値(.248 $p < .01$)が得られた(図1)。この結果、女子の場合の現在の幸福感は母親に対して否定的感情をいっていないこと、父親に対して肯定的感情を強く

図1 現在のハッピー得点を従属変数とする重回帰分析の結果(女子のみ)

(数値は標準偏回帰係数)



* $p < .05$, ** $p < .01$

もっていることがかかわっていることが明らかになった。これは娘が父親に対して困ったときには相談し意見を求め、父親を心の支えとすることが現在の娘の幸福感や生活の満足感に大きな影響を与えていることを示している。

分析2：無気力感の構造モデルの検討

分析2の目的は青年期にある男女の無気力感が幼少期からの親のしつけ方略を介したエゴ・レジリエンスとどのように関連しているかを模索した共分散構造分析によるモデルを提起することである。まず共分散構造分析をおこなうにあたって次の手順がとられた。

(1) 無気力感に関する項目の因子分析結果

青年期男女の無気力感を明らかにするために27項目に対して因子分析をおこないその構造を明らかにした。まず主因子法による因子分析さらに因子間の相関が予想されたためプロマックス回転を実施した。その結果、第1因子では「日々の生活で体がだるいと感じることがある」「日ごろ精神的に疲れたと感じる」「毎日の生活で疲れを感じる」「疲れて何もしたくないと思う日がある」の4項目で因子の負荷量が高かったため「疲労感」因子と命名した。第2因子では「朝寝坊などで授業に遅れることがある」「なんとなく授業をサボることがある」「授業の課題の提出が遅れたり出さなかったりすることがある」「大学からの連絡事項を見落としてしまうことがある」「朝食を食べないことがある」の5項目で因子負荷量が高いことから「怠惰な大学生活」因子とした。第3因子では「私は自分がつまらない人間のように思う」「日ごろ目的のない生活をしていて自分がだらけていると感じる」「自分が一人ぼっちだという寂しさを感じる」「私を本当に理解してくれる人は少ないと感じる」「私は自分から進んで物事を行う熱意がないと感じる」の5項目で因子負荷量が高く「自己不全感」因子とした。第4因子は「周囲の人たちとの付き合いは退屈だと感じる」「私は周りの人たちは面白みに欠けると思う」「私には本当に困ったときに助けてくれる人は少ないと思う」「周りの人は助けを求めれば応えてくれると思う」(逆転項目)の4項目で負荷

量が高いことから「疎遠な人間関係」因子とし、さらに第5因子では「自分の将来を真剣に考える気になれない」「自分の将来を考えるとうんざりする」「私の未来には希望がもてない」の3項目で因子負荷量が高かったので「不明確な将来」因子と命名した。第6因子では「スナック菓子(例：ポテトチップス)などを食べる」「ファーストフード(例：マクドナルド)を食べる」「コンビニやスーパーで買った弁当やおかずを食べる」の3項目で因子負荷量が高かったので「手軽な食事形態」因子とした。最後の第7因子では「私は何事にも前向きに取り組む意欲がある」(逆転項目)「私は自分らしさをもっていると思う」(逆転項目)「私は将来の目標を持って生きている」(逆転項目)の3項目で因子負荷量が高かったため「意欲減退」因子とした。7因子の説明された分散の累積寄与率は60.6%であった。各因子の項目素点を合算し項目数で割って尺度得点を算出しさらに α 係数を求めた。その α 係数は第1因子から順に.89、.74、.76、.68、.76、.62、.50となっていた。

(2) エゴ・レジリエンス得点の算出

Blockによるエゴ・レジリエンス尺度は14項目より構成されており、本尺度は1因子構造であるとBlockは提唱している。したがってこの理論にそって全14項目に対して主成分分析を行ったところ、項目10(私は普段、慎重に考えてから行動するほうだ)の因子負荷量が著しく低かったため、この項目を削除して再度主成分分析を行った。その結果、小野寺(2008)の結果と同様に13項目のすべてで負荷量が高い1次元構造の結果を得ることが出来た。内的整合性を検討するために13項目の α 係数を算出したところ.845という高い値が得られた。したがってこれら13項目の素点を合計し項目数で割った合成得点を算出しエゴ・レジリエンス得点とした。

(3) 共分散構造分析によるモデルの検討

親の養育態度とエゴ・レジリエンスとの関係が無気力感に与える影響

親の養育態度として本研究で使用した幼少期からの「けなすしつけ」と「ほめるしつけ」が

どのようにエゴ・レジリエンスに影響を及ぼし、そのエゴ・レジリエンスが無気力感とどう関係しているのかについてのモデルを構成し、そのモデルの適合度について共分散構造分析を実施し検討した。そのモデルでは観測変数の幼少期からの「父親のけなすしつけ」「母親のけなすしつけ」「父親のほめるしつけ」「母親のほめるしつけ」が「エゴ・レジリエンス」を説明し、その「エゴ・レジリエンス」が潜在変数の「無気力感」を説明するというものである。無気力感の指標は「疲労感」「怠惰な大学生活」「自己不全感」「疎遠な人間関係」「不明確な将来」「手軽な食事形態」「意欲減退」である。分析は変数の配置のみを同じにし、変数間のパスの値、これらの変数の誤差の分散は同じであるという制

約をかけずに、男女の多母集団による同時分析を実施した。共分散構造分析で使用する尺度間の相関を Table3 に示した。

変数間のパス係数 (図2、図3)

標準化解で示された変数間のパスの係数をみると、女子の場合は幼少期からの「母親のほめるしつけ」から「エゴ・レジリエンス」へは.29、「エゴ・レジリエンス」から「無気力感」へは-.73というパス係数が得られた。また潜在変数「無気力感」から7変数へのパスを検討したところ、「自己不全感」へ.73、「意欲減退」へ.68という比較的高いパス係数が得られた。エゴ・レジリエンスが自己不全感や意欲減退を抑制する働きをしていることが示唆される。

Table3 共分散構造分析で使した下位尺度間の関連 (相関係数を示す) (男性=91名、女性=250名)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1. 疲労感	----- -----										
2. 怠惰な大学生活	男 .306*** 女 .288***										
3. 自己不全感	男 .616*** 女 .464***	.299** .130*									
4. 疎遠な人間関係	男 .440*** 女 .227***	.224*	.453*** .449***								
5. 手軽な食事形態	男 .217* 女 .159*	.315** .266***	.232* .198*								
6. 不明確な将来	男 .499*** 女 .242***	.388*** .222***	.523*** .294***	.262** .258***	.309**						
7. 意欲減退	男 女 .156*		.334*** .276***		-.286**	.265***					
8. エゴ・レジリエンス	男 女 -.189**		-.370*** -.306***				-.429*** -.541***	-.132*			
9. 幼少期からの父親のけなすしつけ	男 女		.421*** .144*		.269**						
10. 幼少期からの母親のけなすしつけ	男 女 .139*		.366*** .241*				-.244*		.771***		
11. 幼少期からの父親のほめるしつけ	男 女 -.135*		-.190** -.180**		.212*		-.212* -.193*	.264** .208***		-.205***	
12. 幼少期からの母親のほめるしつけ	男 女 -.238***		-.251*** .227***		.224*		-.236* -.231***	-.330*** .257***		.717*** -.156*	.728***

図2 幼児期のしつけ方略、エゴ・レジリエンスおよび無気力感の関連
(共分散構造分析によるモデル：女子)

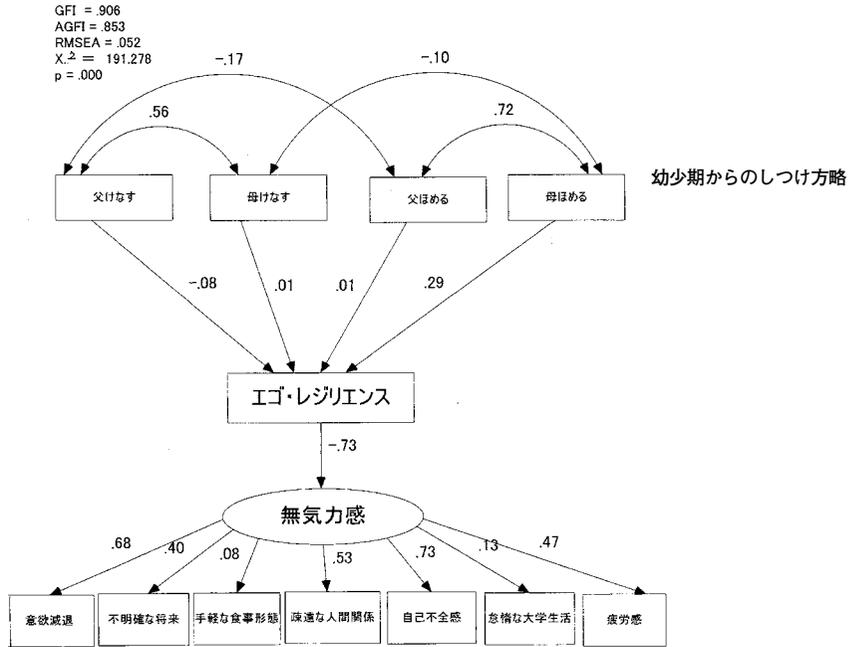
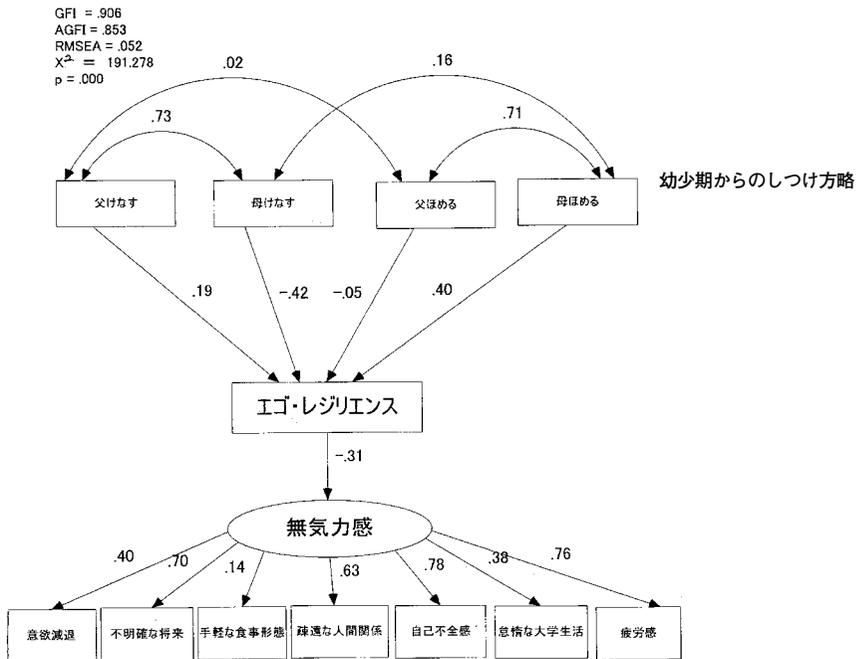


図3 幼児期のしつけ方略、エゴ・レジリエンスおよび無気力感の関連
(共分散構造分析によるモデル：男子)



一方、男子の場合は「母親のほめるしつけ」から「エゴ・レジリエンス」へは正の有意なパス係数(.40)が得られているが、「母親のけなすしつけ」から「エゴ・レジリエンス」へも負の有意なパス係数(-.42)が得られていた。女子とは異なり母親からほめられるだけではなく、母親からけなされるようなしつけを受けて育ってきていないことが男子のエゴ・レジリエンスを高めることに影響を与えているようである。また「エゴ・レジリエンス」から潜在変数の「無気力感」へは-.31という5%水準で有意な数値が得られている。「無気力感」から7変数へのパスでは「自己不全感」へ.78、「疲労感」へ.76、「不明確な将来」へ.70、「疎遠な人間関係」へ.63、「怠惰な大学生活」へ.38という比較的高いパス係数が得られた。 χ^2 検定の帰無仮説は棄却されず、適合の指標は許容される値が得られた。モデルの適合度は $\chi^2 = 191.3$, $p < .001$, GFI=.906, AGFI=.853, CFI=.774, RMSEA = .052であった。

総合考察

本稿では親子関係が青年期後期の男女の生活意識とどのようにかかわっているのかについて検討した。青年の生活意識は現在の生活への満足感(分析1)と無気力感(分析2)という視点から検討した。分析1では青年期後期の男女の父親・母親に対する肯定的感情と否定的感情および親から受けてきたこれまでのしつけ方略の評価について検討した。その結果、女子は父親に対しても母親に対しても困ったときには親からの承認を求めたり、気持ちを理解してほしいと思い、両親を心の支えとしていることが明らかになった。その一方の否定的感情は男女で有意差は認められず、男性も女性も同程度、親に対して否定的な感情をいだいている傾向がみられた。青年期になるとそれまでとは違って親に対して反抗的な態度をとり親と口をきくのもうっとおしいと感じる青年が多い。本稿の分析では親がいろいろ口出ししてくるのをうっとおしく感じ意見が対立する程度が男女で同程度であったが、これは青年期の親子関係の特徴を示す結果であったと理解できよう。また女子は困ったときには父親や母親に意見を求めたり、辛

い時には親のことを思い浮かべる傾向が男子よりも強かったが、否定的な側面では性差がみられなかった。この結果は、女子の方が父母を心の支えとし親との情緒的結びつきが強いことを示している。

次に青年の友人関係の満足感、大学生活の満足感、親との関係の満足感そして生活全般の満足感という側面からなるハッピー得点を算出し、そのハッピー得点がどのような親への感情によって規定されているのかを重回帰分析によって明らかにした。その結果、女子の場合は母親に対して否定的感情が強くないこと、父親に対して肯定的感情を強くもっていることが現在の生活の満足感にかかわっていることが明らかになった。娘が父親に対して困ったときには相談し励ましてもらったり意見を求め、父親を心の支えとすることが現在の娘の幸福感や生活の満足感に大きな影響を与えていることは興味深い結果であった。父親が娘の成長にどのような影響を与えているのかについて小野寺(1984)は研究している。その研究結果から異性としての父親がどのような態度を娘の前でとるかが娘の異性観の形成に影響を与えることが明らかになっている。今回の研究では、同性の母親ではなく異性の父親との肯定的な情緒的結びつきが強いことが、娘の生活満足感や幸福感に大きな影響を与えていることが示された。この結果は今後の父娘研究を推進させる上で大きな成果であった。しかしながら息子のハッピー得点と父親・母親への肯定的・否定的感情のいずれもが統計的に有意にかかわっていなかった。男子の場合は親との関係以外の要因が現在の幸福感に影響していることが考えられるので、今後はそうした点についても検討していきたい。

分析2では近年、無気力な青年たちが増え続けているという現状にあって、どのように親子関係が青年期の無気力感に影響を与えているのか、その場合にエゴ・レジリエンスが果たす役割がどのようなものかを共分散構造分析をおこない検討した。その結果、幼少期からの母親の「ほめるしつけ」方略がエゴ・レジリエンスを高め、そのエゴ・レジリエンスが無気力感を軽減させることにつながっていることが示された。

さらに男子の場合、母親から無視されたり、叩かれたりといった「けなすしつけ」を幼い頃から受けていないこともエゴ・レジリエンスを高めることに関連していた。青年の無気力感を軽減させるには、親の養育態度が直接かかわるのではなく、エゴ・レジリエンスの高さが無気力感の軽減につながっていくことになるのである。このことからエゴ・レジリエンスをいかに高めるかが若者の無気力の軽減には有益であるといえよう。

幼児をもつ母親のエゴ・レジリエンスと養育態度との関連を検討した小野寺の研究(2008)では、エゴ・レジリエンスが高い母親は子育てにあまり後悔することなく、自信をもち柔軟に子どもに対応していることが明らかにされていた。さらに同傾向が強い場合、子どもを叩いたり、「バカだね」「役立たず」と子どものことをけなすしつけをしていない傾向も示されている。今回は親自身のエゴ・レジリエンスの高さを測定していないので、今後は親自身のエゴ・レジリエンスを直接測定し、親から子へのエゴ・レジリエンスの影響について研究を深めていきたい。

以上、考察してきたように父親よりも母親が「ほめるしつけ」を幼少期から積極的におこなうことで子どものエゴ・レジリエンスは高められ、そのエゴ・レジリエンスによって嫌なことやめんどくさいことにも積極的にかわり、毎日の生活に希望を持って前向きに生きていこうとする気持ちが形成されていくことが提起されたと考えられる。現代の親たちは子育てにおいて子どもをほめるよりも叱ることの方が多い。どのようにすれば母親が子どものよさを見出し「ほめるしつけ」を実践できるようになるかを心理学は考えていく必要がある。

引用文献

- Block, J.& Block,J., (1980) The role of ego-control and ego-resiliency in the organization of behavior, In W.A.Collins (Ed),The Minnesota Symposia on Child Psychology, 13, 39-101.
- Block.J.& Kremen,A., (1996) IQ and ego-resiliency: Conceptual and empirical connections and separateness. Journal of Personality and Social Psychology, 70, 349-361.
- 畑 潮・小野寺敦子 (2007) 日本語版ER (Ego-Resilience) 89尺度作成の試み 日本発達心理学会第18回大会 学会論文集、p705.
- 石毛みどり (2004) 中学生におけるレジリエンスと無気力感との関連 お茶の水女子大学人間文化論叢、6、243-252.
- 石毛みどり・無藤 隆 (2005) 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連 教育心理学研究、53、356-367.
- 笠井孝久・村松健司・保坂 亮・三浦香苗 (1995) 小学生・中学生の無気力感とその関連要因 教育心理学研究、43、424-435.
- 春日由美 (2000) 日本における父娘関係研究の展望 九州大学心理学研究、1、157-171.
- Klohn,E.C.(1996) Conceptual analysis and measurement of the construct of ego-resiliency. Journal of Personality and Social Psychology, 70, 1067-1079.
- Masten,A.S.& Reed,M.J.,(2002) Resiliency in development. In Synder. C.R.,& Lopez,S.J (Eds.), Handbook of positive psychology. New York: Oxford University Press. pp74-88.
- 諸井克英(2006)女子青年における父親の魅力-父親との接触経験の影響-同志社女子大学 総合文化研究所紀要、第23巻、71-80.
- 小田 晋 (1991) 子どものアバシーとは何か 教育心理、39、6-11.
- 小野寺敦子 (1984) 娘からみた父親の魅力 心理学研究、55、289-295.
- 小野寺敦子 (1993) 日米青年の親子関係と独立意識に関する比較研究 心理学研究、64、147-152.
- 小野寺敦子 (2008) ego-resilienceが母親の養育態度に与える影響 目白大学心理研究紀要、4、25-34.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治(2002) ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性-精神的回復尺度の作成- カウンセリング研究、35、57-65.
- 下坂 剛 (2001) 青年期の各学校段階における無気

- 力感の検討 教育心理学研究、49、305-313.
- 下山晴彦(1997) 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究、43、145-155.
- 菅原ますみ・八木下 暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山 葉矢・菅原健介・北村俊則(2002) 夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連-家族機能および両親の養育態度を媒介として- 教育心理学研究、50、129-140.
- 鉄島清毅(1993) 大学生のアパシー傾向に関する研究 教育心理学研究、41、200-208.

Influence of parents and child relationships on adolescent apathy

— the function of ego-resilience —

Atsuko Onodera Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2009 vol.5

【Abstract】

The purpose of this study was to examine the relationships between father-child and mother-child emotional ties and the university students' happiness and apathy. In the study one, positive and negative feelings towards fathers and mothers were analysed from the standpoint of sex difference. Female students showed the stronger positive feelings towards fathers and mothers than male students. But the significant difference between both sexes was not found on the negative feelings. In case of females, slightly weak negative feelings towards mothers and positive feelings towards fathers exhibited the strong relationship to the current daily happy feelings. So, in order to have the satisfying feelings, women need to construct the close ties with their fathers. On the study two, the relationships between students' apathy and parents' child rearing attitudes and ego-resilience were examined by using the covariance structure model. This result showed that mothers' praising child tended to raise the ego-resilience and this ego-resilience helps to reduce the apathy.

keywords : ego-resilience, apathy, positive emotion toward father/mother, negative emotion toward father/mother.

